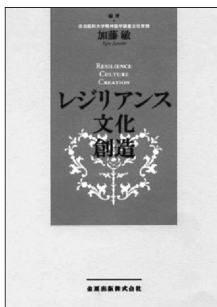


## ■ 書 評



### レジリアンス・文化・創造

加藤 敏 編著  
金原出版 2012年5月  
224頁, 定価 2,940円

本書は、先に出版され好評を得た同じ編著者の手による「レジリアンス—現代精神医学の新しいパラダイム」(加藤 敏・八木剛平編集, 金原出版, 2009年)の続編とあって良いだろう。4つのパート—第1部「文化・社会とレジリアンス」, 第2部「トラウマとレジリアンス」, 第3部「語りとレジリアンス」, および第4部「音楽の創造性とレジリアンス」—により構成され, 各3編ずつ, 合計で12編の論文をおさめる。著者には, 精神医学・心理学の専門家以外に, 哲学者や音楽療法の専門家も加わっており, 先の「レジリアンス—現代精神医学の新しいパラダイム」よりも, 一層, 人文科学領域に思索の範囲を広げている。一部の論文は, 加藤氏が大会長をつとめた第58回日本病跡学会(基調テーマ「日常生活における創造性—自己表現とレジリアンス」)における2つのシンポジウムの発表論文に加筆修正したものを含み, 語りや創造性といった話題にまで著者らの論考は自在に及ぶ。各論文は, いずれも生き生きとした文章で書かれており, その発想の新鮮さ, 奇抜さと合わさって, 自由闊達な躍動感がまずは本書全体を強く印象付ける。加藤氏らが, 英語のresilienceよりも仏語のrésilienceに由来する「レジリアンス」の標記にこだわっていることと無関係ではないだろう。

今般, 本書が出版された背景には, 昨年(2011年)の東日本大震災と福島原発事故が, 私たち日本人の心の有り様に与えた衝撃も関係している。

加藤氏らは, この未曾有の危機的な局面においてこそ, レジリアンスの視点が有用であろうと訴えるのである。このことについて, まずは, 本書の中核をなす加藤氏自身の論文, 「現代人のヒュブリス(思い上がり)と外傷後成長—三・一一に触発されて」を読んでみたい。科学, 哲学, 宗教学, 民俗学等々, 該博な知識を駆使した壮大な論考もさることながら, 実際に自身も被災地を訪れた加藤氏は, 純粋な祈りを通して自然への畏敬と試練への勇気を復興させうる可能性を格調高い文章によって示唆する。ここにおいて, レジリアンスの本質としてのスピリチュアリティ(霊性)の再生という命題が明らかにされ, 評者は静かな感動を覚えた。

他の著者も多士済々ゆえ, 一筋縄ではゆかないレジリアンスの諸相がめくるめく展開する。なかでも, 石川 元氏の「家族・個人のレジリアンス(韌性)とナチスの健康哲学—ハンブルガーとアスベルガーによる教訓」, 八木剛平氏の「レジリアンスの視点からみた統合失調症の手記」, 河本英夫氏の「経験の可能性の拡張とレジリアンス」, 稲田雅美氏の「音楽と言語が紡ぎ出す創造空間—芸術療法にみるレジリアンスの萌芽」, 馬場 存氏の「音楽創造の症候学, 自己治癒, 霊的体験—音楽創造の治療的側面」などの論文を, 評者は興味深く読んだ。近年, 精神医学・心理学においてレジリアンスの概念が脚光を浴びるに至った歴史的経緯と意義については, 本書冒頭の下地明友氏の包括的なレビュー「レジリアンス・病い・文化—レジリアンスの医療人類学」が大いに参考になる。

以上のように評すると, 本書は一般の臨床医には馴染みにくい人文科学系寄りの論文集と解する向きもあるかもしれない。しかし, それは誤りである。様々な精神障害の病態を旧来のストレス・モデルのみで理解してきた臨床医には, 治療的方略についてしなやかな気付きが与えられよう。かくも, 私たちの内なるレジリアンスをも賦活しうる良書である。(黒木俊秀)